

國學院大學學術情報リポジトリ

The archaeological methods about category recognition of the Jomon pottery linked to ritual

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 耕作 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001991

土器のカテゴリ認識と儀礼行為

—「モノと心」研究の一視点とその方法論—

中村耕作

要旨

〈儀礼行為に関わる土器のカテゴリ認識研究〉の意義と方法論を明らかにするため関連する議論を整理する。まず「モノと心」研究の重要性を論じ、次いで神道考古学・祭祀考古学における動向を紹介し、研究対象としての〈形態と機能が連関する遺物〉を歴史的脈絡を重視して論じる意義を明らかにする。次いで、方向性の一つとして「カテゴリ認識」研究の人類学的意義を確認する。最後に、具体例として縄文土器の「カテゴリ認識」を扱った先行研究について論点・方法を整理して、特定の脈絡（儀礼行為）における特定種の土器のあり方を検討することの有効性を論じる。

キーワード

モノ、パターン、脈絡（コンテクスト）、象徴

本稿の論点

本稿は、「モノと心」研究としての考古学の一視点として、〈儀礼行為に関わる土器のカテゴリ認識研究〉の意義と方法論を明らかにするため関連する議論を整理する。論点が多岐にわたるため予め構成を示しておく。

- 1：考古学の各学派の主張を検討しながら「モノと心」の研究の意義を論じる。
- 2：大場磐雄の神道考古学における祭祀専用品の重視傾向の学史的な理解を提示するとともに、近年の國學院大學における動向を紹介し、〈形態と機能が連関する遺物〉を研究対象として、歴史的脈絡を重視して論じる意義を明らかにする。
- 3：人類学の先行研究を紐解きながら、「カテゴリ認識研究」の意義を確認した上で、具体例として縄文土器の「カテゴリ認識」に関わる先行研究を概観し、その論点・方法を整理する。
- 4：「カテゴリ認識」の検討には特定の儀礼行為における特定種の土器のあり方を検討することが有効であることを論じ、そのパターンの具体例の若干を紹介する。

1. 「モノと心」の考古学

モノ学としての考古学

「考古学は過去人類の物質的遺物（に拠り人類の過去）を研究するの学なり」（濱田1922：11頁）

濱田耕作は、日本でもっとも著名な「考古学の定義」を示す中で、「物質遺物の研究」、すなわち「物質的資料を取り扱う科学的研究方法」を考古学の特徴とし、「過去の如何なる方面を研究するかに就きては之を限定せざりき」という立場を示している。他の多くの考古学の定義においても、歴史学あるいは人類学などを目的として掲げつつも、基本的には物質文化（モノ）を資料とする点に考古学の独自性が示されている。

その場合、モノはあくまで手段であり、それを資料として、何か明らかにすべき問題に挑むという方針が一般的である。しかし、そもそも「モノ」を作り出すのは人間自身であり、そこには様々な情報が詰め込まれている。そこには、社会関係や時代性・地域性を反映して無意識のうちに込められた情報もあるが、一方で、その素材・形・大きさ・重さ・色・文様記号・装飾などには作り手・使い手が意識して込めた思いも存在するはずである。人間はそうして作り出されたモノの中で、常にモノからのメッセージを受け取っているのである。モノを第一の資料として位置づけ、特に長期的視点、細部観察視点など独自の領域を持つ考古学は、こうした研究をリードしていく必要がある。

ポストプロセス考古学の視点

こうしたモノとヒトとの双方向的な関係は、ギデンズ（1989）やブルデュ（1988・1990）の構造化に

関わる議論が、ポストプロセス考古学に導入されて以来、考古学でも重要な課題として意識されることとなった。ホダーはアフリカでの民族考古学的調査によって各種の物質文化のあり方や分布が、部族間や部族内の年齢集団間など様々な社会的関係と密接な関係を有していること、また、女／男、豚／牛などの二項対立が、社会関係と物質文化との間で連環(相互規定)していることを主張した(Hodder1982)。こうした視点は日本でも墓制研究を中心に1990年代以降積極的に導入されるようになる。溝口孝司(1993・1998ほか)は、弥生時代の北部九州の墓制を論じる中で墓列の方向や甕棺の挿入方向と参列者の位置関係を論じている。時津裕子(1999)は近世墓標の型式差を格差の表示装置として捉え、単に社会関係の反映ではなく、その維持に寄与したことを示した。朽木量(2004)は物質文化研究としての民族学・考古学という視点で近世・近代墓標を取り上げ、モノの作り手と使い手の関係を検討した。

認知考古学におけるモノと儀礼

心の考古学を標榜する認知考古学は様々な問題設定・視点・対象をもって展開しているが、レンフリーューらは論文集『認知と物質文化—象徴的記憶装置の考古学—』を編集し、人とモノとの双方向的な関係を改めて整理した(Renfrew and Scarre 1999)。

日本においては認知考古学の先鞭をつけた上野佳也(1980・1983ほか)が、まず土器情報の伝播の問題を心の問題として位置づけた。松本直子(1996)も土器の製作に関わる問題から議論を始めており、1990年代においては日常的なモノに関わる認知活動が議論の素材として取り上げられることが多かった。しかし、2000年代になると、「世界観とシンボリズム」が認知考古学の論集に登場し(松本ほか編2003)、松本(2006)も土偶を議論の対象として重視するようになるなど、儀礼行為に関わる認知活動への関心が増加している。小杉康(2006)も象徴的器物の発生を認知考古学的に論じることを試みている。

「モノと心」の考古学と儀礼研究

このように、モノ自体ではなく、モノとヒト(心)の双方向的な研究を行う場合、儀礼に関わる事象がその対象として選ばれることが多い。これは、心のあり方が他の場合と比較して説明しやすいという点

にあると思われる。また、祭祀や儀礼というイデオロギーに関わる分野は文化の独自性がよく立ち現れる部分であり、モノと心の関わりを歴史的・具体的に検討しようとする方向性からも好対象と言えよう。

2. 祭祀考古学における「第一の道具」

(1) カタチと機能の連関／非連関

本節では祭祀・儀礼に関わる考古学研究において、モノがいかに検討されてきたかを振り返るが、その前に、モノの基本的な区分を確認しておきたい。

小林達雄(1977・1997)は道具を「第一の道具」と「第二の道具」の2種類に区分している。第一の道具は、食糧獲得に関わる労働生産用具・厨房具・工具を基本内容とし、汎人類的道具と位置づけられる。一方、土偶・石棒などの第二の道具は儀礼・呪術にかかわる、各文化独自の道具とされる。前者が形態から機能用途を推定できるのに対し、後者はその関係が、事物と名前との関係同様、各文化の世界観にもとづく恣意的なものであると説明されている。縄文文化に第二の道具が多いこと、特に中期以降に増加するという縄文文化の画期の指標となること、銅鐸などの集団参加型の弥生文化の第二の道具と異なり縄文文化のそれはほとんどが個人型であるという違いが認められること、といった種類・量の多寡、サイズ・材質の違いなどの「あり方」を比較する点に小林の視点の意義がある。

こうした2区分は、モノのもつ社会的性格を検討する上で非常に効果的なのだが、食糧獲得に直接関わらないものの、形態と機能が連関する道具(例えば楽器)をいずれに分類すべきか、といった問題を残している。そこで、本稿は、形態と機能の連関の有無によって、大きく2つに区分することとし、それぞれ「形態機能連関型」「形態機能非連関型」と仮称したい。

(2) 神道考古学の論理構造とその背景

神道考古学における形態機能非連関型

祭祀考古学の基盤となる神道考古学は大場磐雄が提唱し(大場1935a)、生涯をかけて体系化した学問領域である。「神道に関する諸現象を考古学的に考究するの学」(大場1964)とされたが、古墳時代の祭祀遺跡の研究が中心であった。その特徴は、1948年

の学位論文(大場1970)によく現れている。まず、ページ数から大場が重視した点を抽出すると、①祭祀遺跡と祭祀遺物に分けたうちの前者、②祭祀遺跡の中でも山・石・海などの自然物を対象とする遺跡、③祭祀遺物の中では祭祀用小形土器(手捏土器)や石製・土製模造品および子持勾玉や土馬、という結果となり、形態機能非連関型の「場」・遺物が検討の中心であった。

初期の祭祀遺跡研究における形態機能非連関型

大場は当初から形態機能連関型を軽視したわけではない。大場の神道考古学は数段階に分けることができるが(中村2008f)、神道考古学提唱以前の「神社と考古学」(宮地1926-28)においては、形態機能連関型の土器・剣・鏡・玉について模造品以上の説明を加えている。

私見では、手捏土器や模造品が祭祀遺跡研究において重要な位置を占めるようになったのは、1927年に調査・刊行された静岡県洗田遺跡の考察を契機とする。洗田遺跡では手捏土器や土製模造品が多く出土したが、既に後藤守一や柴田常恵らによって石製模造品が祭祀遺物と考証されてきたことや、それらの一部が古社境内から出土することなどから、模造品出土地が祭祀遺跡と考えられることが意識された(谷川1927)。続く「原始神道の考古学的考察」(大場1930)では、列挙された祭祀遺跡の多くが模造品や手捏土器の出土を根拠とするものであった。

これらの遺物は、遺跡それ自体には特徴が認められない遺跡を「祭祀遺跡」と認定する根拠として、当時の祭祀遺跡研究においては重要な意義を持っていたのである。また、当時多くの巨岩が「巨石遺跡」として喧伝されていた中で、考古学的な年代を示し得たことが大場や樋口清之の研究の価値を高めたが(中村2009a)、その根拠となったのも、土器類とともに、古墳からも出土例のある石製模造品であった。

学位論文における形態機能非連関型

これに対し、「神道考古学」提唱(大場1935a)以降の研究は、山・石・池・海などの自然物を対象とする遺跡に重点を置くこととなる(大場1935b・1964ほか)。学位論文においても重視された「自然を対象とする祭祀遺跡」は現在でも特徴的なランドマークである一方、祭祀の目的や行為とは必ずしも直結しない。これらの研究では、祭祀遺跡の認定根

拠、すなわちそれらの自然物が信仰の対象であることの根拠は記紀や風土記などの古典文献や現在の神社信仰の存在にあり、考古学的資料の役割は、それが古墳時代まで遡ることを示すことに置かれるようになるのである。

学位論文では祭祀遺物が「祭祀遺跡から発見された遺物」と規定され、遺物そのものからの定義ではなくなる。土師器・須恵器や鏡についても触れられるものの、記述は少ない。重視された手捏土器や模造品、子持勾玉、土馬などは、形態機能非連関型の遺物である。これらの遺跡・遺物は考古学的な観察だけではその意味を検討することが困難な資料であったことを確認しておきたい。祭祀遺物の特質として挙げられた「伝統の尊重・清浄性の強化・形状の形式化」の3点は、その意味を掘り下げるといよりも、「あり方」を示すものである。戦後も土馬や子持勾玉の考察が発表されたが、性格については戦前の考察を越えるものではなく、新たな成果が得られたのは変遷や系統などの点であった(中村2010a)。

神道考古学の研究戦略と形態機能非連関型

このように、形態機能非連関型の祭祀専用品は大場以前より祭祀に関わることが指摘されていたものの、その研究上の意義は当初「祭祀遺跡」の認定根拠にあり、その後、祭祀遺跡の認定根拠が民俗事例に移った後は、祭祀遺跡出土の特徴的遺物として、そのあり方が検討されるのみであった。祭祀行為全体を視野に入れて一般遺跡から出土する器物を含めて論じられたものではなく、研究戦略上の問題から、神道考古学が独自に検討すべき分野として特に祭祀専用遺物を取り上げられたのである⁽¹⁾。大場の神道考古学において、祭祀遺跡や祭祀遺物に意味を与えるのは、考古資料の観察ではなく、多くの場合文献・民俗資料(特に後者)であった。いうまでもなく大場は國學院大學在学時に折口信夫の片腕として活躍し、後年折口五博士に数えられた経歴を持つ⁽²⁾。大場が対象とした古墳時代はまだ近代の民俗と繋がる部分が多かったため、そうした研究法が可能だったのである⁽³⁾。

(3) 國學院大學における近年の祭祀考古学の動向

近年、神道考古学を発展させて「祭祀考古学」が

提唱されたが（杉山1994）、それは「神道」の連続性で説明し得ない、先史時代や国外まで視野を広げて「祭祀」行為全般を検討しようとする領域を含んでいる。引き続き研究の中心は古墳時代の祭祀遺跡ではあったものの、大場のような民俗事例に依拠しない、あるいは依拠できない分野においても、祭祀専用品を重視する傾向は継続することとなった。

一方、國學院大學の21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成（2002-06年度：拠点リーダー小林達雄）」やオープンリサーチセンター選定事業「モノと心にもみる伝統の知恵と実践（2007年度～：センター長杉山林継）」の中からは、形態機能非連関型のみ限界を指摘し、広い視野から「祭祀」を捉える方向性が示されてきた。

例えば、早くから縄文時代人の認識・観念について独自の考察を示してきた小林達雄⁽⁴⁾は「縄文革命」論の中で定住によるウチとソトといった抽象的観念の成立を改めて論じ（2003）、縄文人の思考の全体像を検討した（2008）。藤本強（2007）は基層文化に関わる宗教や信仰を検討するにあたっては、ヨーロッパの概念をそのまま持ち込むのではなく、東アジア的視野において自然環境と基層文化の関係を理解した上で検討する視点を示した。これらは、「祭祀」という行為だけでなく広く思考・観念を当時の生活環境の中で理解する必要性を示したものである。

吉田恵二（2007・2008・2009）は縄文時代から古代の土器を概観してヒトと神が同じ器を用いることが普遍的に存在すること、谷口康浩（2006・2009a・2009b）は縄文時代の竪穴住居の空間など普遍的な資料における石棒・石皿や配石の空間配置などを分析し、そこに示された象徴観念の表出パターンが変化することなどを論じた。小林青樹（2007・2009a・2009b）は弥生土器に描かれた絵画をもとに、男／女、人間界／自然界などの象徴的対立観念の復元を試みている。石井匠（2009）も縄文土器の文様全般を分析し、二項対立や螺旋構造などの構造を読み取っており、普遍的な資料の中に観念を追求する視点を強調している。

阿部昭典（2004・2006・2009ほか）は祭祀・儀礼に関わる有孔鏝付土器や浅鉢、徳利形土器などの縄文土器の器種の多様化のプロセスを検討した。また、田中大輔（2009）は古墳時代前後の土器集積遺構を

取り上げる中で壺・高杯などの器種の構成に注目している。

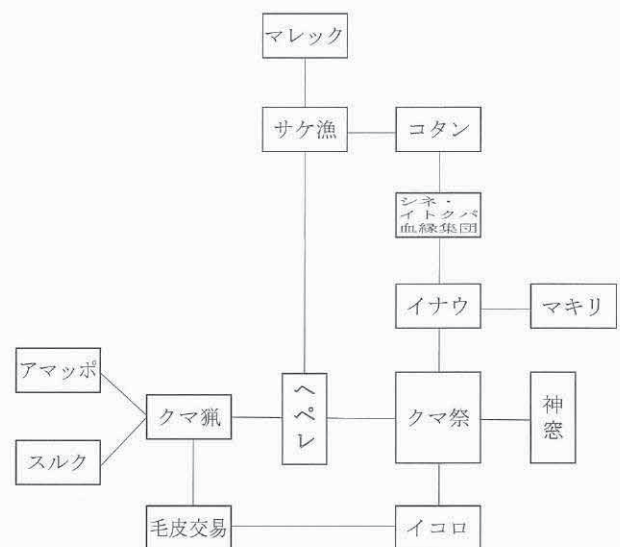
小林達雄や藤本の視点はもはや祭祀考古学の枠を超えているが、その他の論考も小林のいう第一の道具にはほぼ相当する形態機能連関型の場や道具に表出された観念・象徴性や、それらと祭祀・儀礼との関係を検討する視点に基づくものであり、従来とは異なった視点として評価される。

（4）祭祀・儀礼研究における形態機能連関型資料の意義と歴史的脈絡への注目

形態機能非連関型の遺構・遺物は、その形だけではその用途を特定し難い。それらを対象とした従来の研究の多くが、民族学・民俗学の事例を援用して用途・意義を推定するに留まったのはそのためである。これに対し、形態機能連関型は、具体的な用途を推定できるため、その用途と祭祀儀礼や観念との関係という1段階踏み込んだ検討することが可能である。

ところで、祭祀・儀礼やそれに関わるモノの社会的機能を突き詰めて帰納的に論じていくと、多くの場合、「集団の結束⇔社会的秩序の再確認・再構築」というほぼ同様の結論に至る。また、例えば石井が論じた縄文土器の文様構造論などには既に二項対立という汎人類的な主題が存在する。

このように考えると、モノと人との具体的な関係を検討する考古学研究においては、むしろ、渡辺仁（1972）が、システム論的な「アイヌ文化複合体」



第1図 渡辺仁（1972）の「アイヌ文化のクマ祭文化複合体」

(4) 國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要 第2号（平成22（2010）年3月）

の研究で示したように〔第1図〕、個々の歴史的脈絡において、そうした機能がいかに他の要素と関わりあいながら存在してきたかを検討するべきであろう。中村大（2009）も北陸の環状木柱列を例に、「一般的機能」を前提として諸コンテキストとの関係の具体的なあり方を論じている。

3. 「カテゴリ認識」という問題設定

(1) 「カテゴリ認識」の人類学的意義

モノにこめられた観念・象徴性や他の事象との関係性は、「当時の人々がモノをいかにみていたか」、すなわち「カテゴリ認識」の問題として捉えることができる。

人類学においては、トーテムズムへの関心に関わって、古くから現地社会における「分類」の意義が注目されてきた。デュルケムとモースは「分類の若干の未開形態」において、動植物・器物から方位・天体・色彩・季節・創造・破壊などの抽象観念に至るまでの様々な要素が「トーテム」に関わって分類配置されている体系の事例を紹介し、分類行為が文化的な所産であることを主張した（デュルケム1980）。エルツ（1980）は『右手の優越』において、左右の認識を問題とした。その後、レヴィ＝ストロース（1970・1976ほか）は「トーテム」を「野生の思考」に基づく多数の二項対立の連環と捉えなおし、構造人類学的手法を提示した。こうした視点は儀礼行為における象徴的二項対立の操作に注目したりーチ（1981）やターナー（1969）の象徴人類学へと受け継がれ、儀礼の維持・変容における象徴の果たす意義が示されている。

一方、人間と動植物との関係に注目し、その語彙の分析から「民俗分類」に迫る認識人類学の流れがある（松井1991）。そこでは、個々の文化における認識の差異を超えた、人類の認識の普遍性が明らかにされている。

このような人類学の研究成果は考古学にも大きな影響を与え、欧米における構造主義考古学、象徴考古学、あるいは認知考古学の潮流を形作ることとなる（Miller1982）。民族考古学的な成果としては、本稿冒頭で紹介したホダーのアフリカにおける事例研究が典型であり、各種の物質文化の取り扱い（カテゴリ）やその動態から社会のあり方を検討する視

点が提示されてきた。また、ミラーは現代インドにおける土器をめぐる技術・機能・装飾・象徴・イデオロギーなどの様々な認識を検討している（Miller1985）。

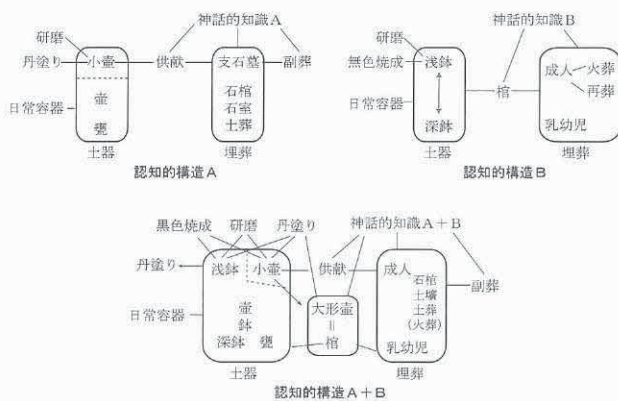
一方、ケンプトン（Kempton1982）は連続的に変化する図形を用いた器種分類の境界をいかに捉えるかという課題を民族学的なアンケート調査によって検討した。

(2) 土器の「カテゴリ認識」研究の意義

本稿では、これまで研究が蓄積されてきた土器を素材としてカテゴリの問題を取り上げる。ここでは、「カテゴリ」を当時の社会によって分類されたある一群に共通する要素としておく。言うまでもなく考古学研究と当時の社会との、分類の「体系」は異なった次元にあるものだが、一方で、土器形式⁽⁵⁾や、器形と装飾が一定の規則性を持った型式のレベルを分類の基本単位とみなすことは許されよう。土器のカテゴリ認識研究とは、それらの単位がいかにグループ分けされていたかを問うものである。必ずしも、全ての土器を対象とする体系でなく、器形・装飾・用途・系統・経済的価値、宗教的意義など多様な分類基準によって1つの土器が複数のカテゴリに所属することを想定している。

編年研究においては、分析の単位となる土器群は、基本的に等価な存在として位置づけられてきた。また、土器の社会性を論じるもののうち、分布を婚姻圏（都出1974、佐々木1981）、あるいはコミュニケーションシステムの範囲（田中1982）に関わるものとして理解する研究においてもやはり土器群を等価として扱ってきた。これに対し、カテゴリ認識研究は、同時期に使用された各種の土器の、社会的な価値の差、意味の差を検討する視点である。

日本において「カテゴリ」の重要性を改めて喚起したのは桜井準也（1991）と松本直子（1997）であるが、両者が扱ったのはケンプトンの方向性に従ったものである。しかし、本稿ではそうしたミクロな視点ではなく、むしろ、松本が前掲論文でイメージスキーマ（認知的ネットワーク）モデルの例として、縄文時代晩期の甕棺から弥生時代の甕棺への変化を、「葬送に関わる土器」という両者が同一カテゴリに属するというスキーマの融合として説明した研究や



第2図 松本直子(1996)による「弥生時代開始期における土器と埋葬に関する異系統スキーマの融合」

[第2図]、冒頭で紹介したホダーによる社会的脈絡と物質文化との関係(分布範囲の問題や、象徴的二項対立の連環など)といったマクロな問題を扱うこととした⁽⁶⁾。

こうした問題意識は、日本考古学、特に土器研究においても既に多くの蓄積がなされてきた。後述するように既に小杉康(1984ほか)がこうした脈絡において「カテゴリ」の語を用いて検討を行っている。ここでは紙数の関係もあり、論のバラエティの豊富な縄文土器のカテゴリ認識の問題に関わる先行研究を整理したい。

(3) 縄文土器の「カテゴリ認識」の先行研究

山内清男の「亀ヶ岡式土器移入・模倣」論

山内清男(1930・1964ほか)は晩期亀ヶ岡式の精製品が東北地方を超えて広範囲に分布する事象について、それが「輸入品・輸出品」あるいは模倣すべき対象としての価値を持っていたとの認識を示している。この山内の認識を亀ヶ岡式土器移入・模倣論と呼んで検討した大塚達朗(2008)は、山内による亀ヶ岡式土器の「精製」・「半精製」・「粗製」の区別を、山内が土器製作単位・土器の格付けに関わる評価体系・それを必要とする社会体制・使用環境および地方社会の分立などの社会関係を読み解くために設定したものとの推測し、「土器型式⁽⁷⁾にはまた多少の器種があり、さらに、いくつかの類型(カテゴリ)に分けられる」(山内1969; 86頁)という発言における「類型」についても、その3区分を指すものと解釈した。

小林達雄の「型式のありかたのタイポロジー」論

小林達雄(1965)は吹上パターンの提唱と同時に、住居床面から完形・略完形土器が出土する事例に注意し、井戸尻パターンと命名した。その後、前期後葉の台付鉢や浅鉢、後期中葉の異形台付土器など、こうした出土パターンが特殊な形態の土器に限られることを指摘し(小林1974)、さらに、こうした土器のあり方の研究を「型式のありかたのタイポロジー」と呼んでその重要性を喚起した(小林1979)。ここでは特定の土器形式が、特定の出土状況と密接なかわりを持つことが指摘されたが、その意味については触れられていない。

安孫子昭二らの「アイデンティティ」論

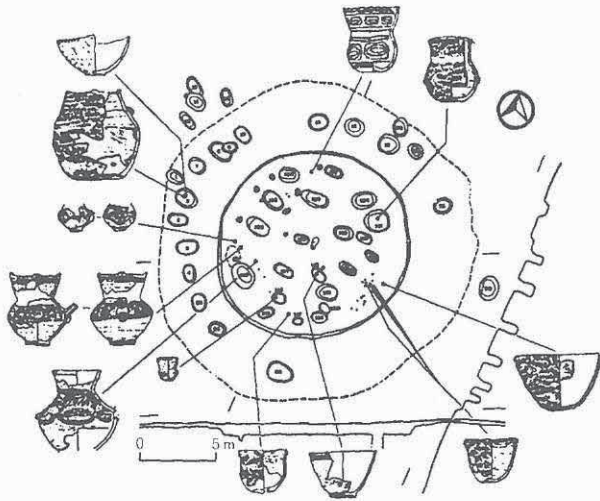
土器の分布圏が社会集団と密接に関わるという議論は古くより提示されてきたが(杉原1943、小林1966、山内1969)、土器の分布現象は社会システムに規定(従属)するものと捉える視点が多かった。これに対し、安孫子昭二(1978・2005ほか)は土器様式を馬印やユニフォームに相当するものとし、縄文時代中期後半の連弧文土器を、加曾利E式への均一化に対する「関東西南部集団のアイデンティティとして」擁立されたものと解釈した。

小林達雄も前期の岐阜県村山遺跡における北白川下層式と諸磯式の並存例を、「あえて相手方と異なる様式を固執しようとした」とみたり(小林1993; 139頁)、中期中葉の各土器様式の隆盛を勝坂式土器様式と火炎土器様式のライバル関係と結び付けて論じている(小林2005)。同様の視点は、同一形式・文様が広域に分布することを根拠とした、後期西日本の縁帯文土器文様(千葉1989)をめぐる議論、あるいは逆に局所的な分布を根拠とした前期関東周辺の諸磯b式獣面把手(関根2004)、後期後葉東北地方仙台湾周辺の入組三叉文高杯(小林圭2006)など分布の解釈に引き継がれている。

林謙作の「祭儀での役割の象徴」論

林謙作(1979)は北海道柏木B遺跡の周堤墓へ供献される土器が形式別の分布から3グループに分けられることを指摘し、祭儀に参加した人々の果たした役割の差と想定した。また、その後の論考(1993)では、石棒や弓など墓坑内の副葬品に男性原理に関わる遺物が多いのに対し、墓坑上の供献品には土器や漆器が多く、これらを女性原理関わるものとして

(6) 國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要 第2号(平成22(2010)年3月)



第3図 林謙作(1979)による周堤墓出土土器の分布図

いる。林は一貫してこれらの遺物を祭儀における役割(仕事)の象徴と考えており、副葬品と供献品との間に差異は、葬送の次第における役割分担に関わるものと想定しているようである。

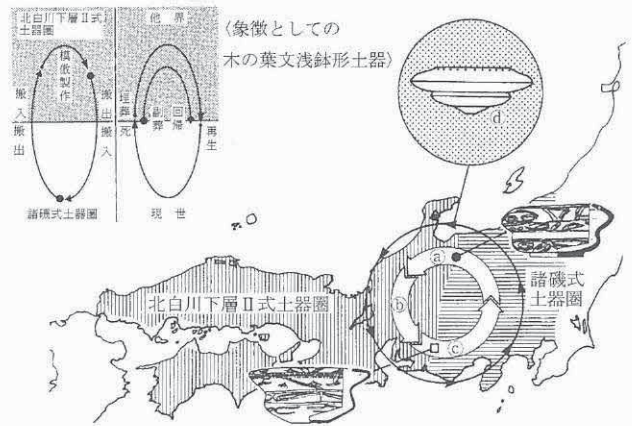
鈴木正博の「経済様式」論・「上位土器」論

鈴木正博は東京都大森貝塚出土土器を再整理する中で精巧な集合沈線文を持つ後期加曾利B1式期の注口土器に注目し、「特定の選ばれた製作者の存在」を予想、「経済様式として扱う必要性」を指摘した(鈴木1980:196頁)。これは、同時期の他の土器との技術差に注目したものであり、鈴木「土器社会論」を構成する重要な要素となった。

近年、鈴木は亀ヶ岡式の「特殊壺」について、遠賀川式の彩文・高杯の成立に関わっていたことを指摘し、「上位土器」の概念を提示する(鈴木2000)。これも同様に土器製作の技術から、土器の階層的な理解を提示したものである。

小杉康の「威信財・交換財」論

「カテゴリ」の語を用いた研究については、小杉康(1984・1985・1988・2003)がいち早く取り組んできた。小林が注目した前期の浅鉢のあり方をさらに掘り下げて検討する中で、まず、民族誌の参照から最低限のカテゴリとして生存財と威信財の2大別を示した。次いで、土器の型式学的検討による関東の諸磯式と関西の北白川下層式との間の模倣関係と広域分布、住居床面や墓坑出土という儀礼行為を示す出土状況から、縄文時代前期の「木の葉文浅鉢形土器」の威信財・交換財としての性格を指摘した



第4図 小杉康(2003)による木の葉文浅鉢の交換模式図

のである。小杉はさらに、循環的な交換と再生観念との類比を想定している[第4図]。

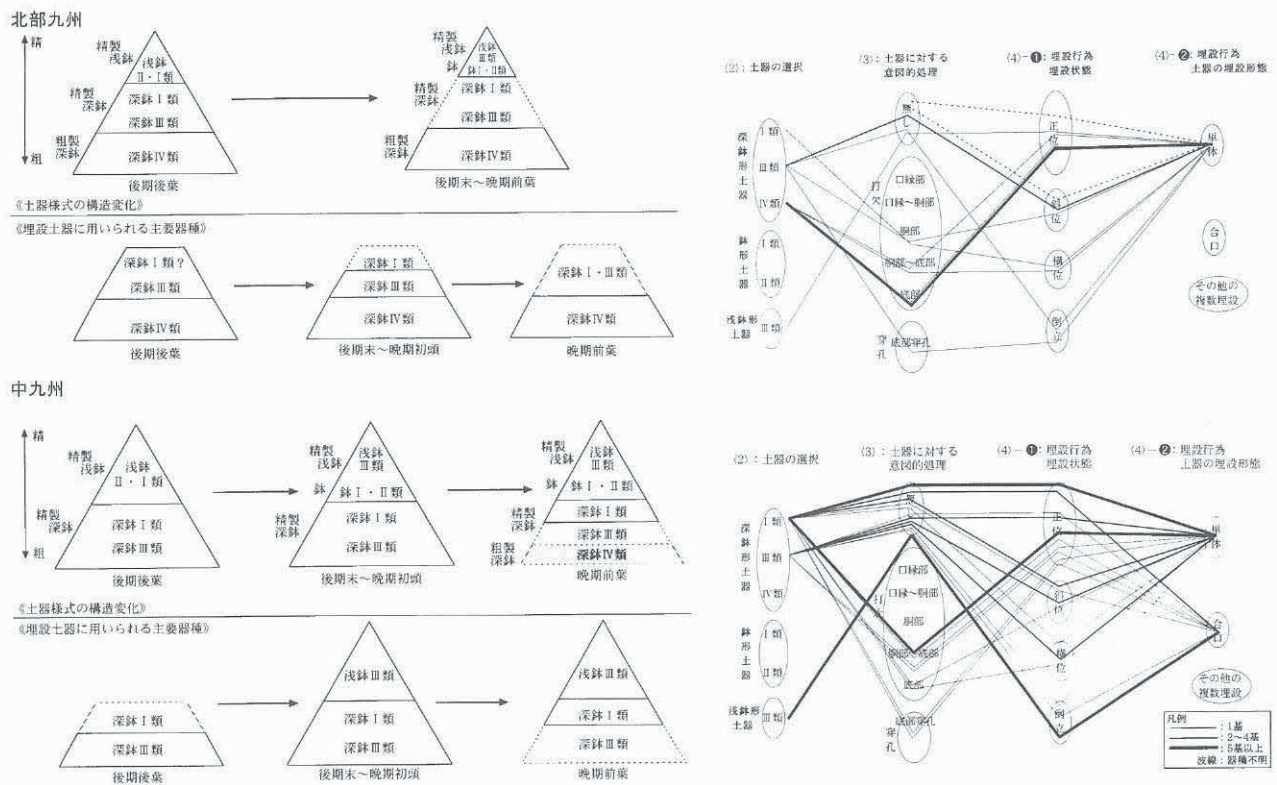
小杉の議論は、これまでの少数の根拠から土器の社会的価値を論じるものとは異なり、模倣関係・広域分布という山内の視点、出土状況という小林の視点の双方を継承した上で、浅鉢の出現経緯まで遡って特殊な土器形式のあり方を検討した重要な研究であろう。

渡辺仁の「威信財」論

渡辺仁(1990)は『縄文式階層化社会』の名で知られる著書の本論を「縄文式階層化社会と土器の社会的機能」と題して発表した。その中で縄文土器工芸の高度な発達を社会生態学の問題として捉える必要性を示し、「威信獲得(確保)用品」と位置づけ、さらに「それを公衆に展示する場(略)が集団儀礼であった」(同135-136頁)と論じた。その論拠となったのは刊行当時知られていた優品の大半が収録された『日本原始美術』第1巻所載土器の多くが儀礼に関わる出土状況であることである⁽⁸⁾。

谷口康浩の「土器情報」論

谷口康浩(1994)は中期勝坂式の諸型式を広域型・漸移型・局地型に区分し、局地型を通婚圏の主要な範囲とした上で、広域型が「最も装飾的で、優品の多い型式である。交換財の一つとして、これらが地域間を移動したこともありうる」とした。ここまでは山内や小杉の視点に近いが、さらに、様式間で型式分布の3種類の現れ方が異なり、その背景に社会構造の差異を想定した点は重要である。



第5図 石川健 (2001) による土器様式構造変化の模式図 (左) と埋設土器の諸要素関係図 (右)

その後、土器様式によって土器と土偶との間の文様の共有事象が異なること (谷口1998)、中期後半期に曽利式土器が東日本で広く移入・模倣された一方、逆の影響関係は認められないことから、曽利式土器情報の価値が他に勝っていた可能性 (谷口2002) など、土器群の社会的意味内容が決して等価ではないことを示している。

土肥孝らの土器廃絶論

土肥孝・中東耕志・山口逸弘 (1996) は、群馬県房谷戸遺跡の墓坑と想定される土坑内出土の中期中葉深鉢の口縁部文様の一部が左右対称に剥ぎ取られていることに注目し、周辺例を含めて土坑内からの土器の出土状況を、完形、突起の打ち欠き、突起のみ、文様を剥がす、底部のみ、底部打ち欠き、胴部以上のみ、文様で最も目立つ部分のみの8類に整理し、打ち欠き例を機能停止のための意図的な所産と位置づけた。さらに、土偶を参照し、当初から文様を剥がすことを意図して製作していた可能性も指摘している。

また、土肥 (2007) は、新潟県笹山遺跡の土器捨て場において、最大級の火焰形土器がまず逆位に据えられたことに注目し、「造形美・文様美の優劣」

が認識されていたことを指摘している。

松本直子の「属性選択の嗜好性」論

松本直子 (1996) は晩期西日本の土器群について研磨や色調、器厚などを検討し、深鉢に関しては半島の土器への「選択的嗜好性」によって色調と器厚の地域差が異なること、在来の精製器種である浅鉢に関しては広域で共通することなどを明らかにした。その背景として各土器群と東日本の縄文的イデオロギーとの結びつきの強さとの関連性 (結びつきは浅鉢の方が強い) や浅鉢・深鉢それぞれにアイデンティティ・イデオロギーとの結びつきの地域差が想定されている。

松本建速の土器製作者論

松本建速 (1998) は晩期終末大洞A'式期から砂沢式期にかけて共伴する遠賀川系の技法で作られた土器の形式が生存に必要な壺と甕に限定され、飾られる土器である浅鉢や高杯が見られないこと、変形工字文が大洞系の浅鉢・高杯にのみ施されること、前者に変化が乏しいか他律的な一方、後者の変化は自律的であることに注目した。松本はその背景として、剥片石器の変化も自律的である点なども踏まえて、土器形式によって製作・使用に性差があったという

仮説を提示した。

石川健の「様式構造と埋設土器」論

石川健(1999)は後期後半～晩期初頭の九州地方北部と中部の形式・型式組成とその精粗の程度を「様式構造」として検討し、後期後半における精製浅鉢—精製深鉢—粗製深鉢という精粗の序列が北部では精製深鉢が抜ける形で精粗格差が増大するのに対し、中部では全体的に精製化すること、粗製深鉢の地域差に対し、精製浅鉢が九州地域を越えて共通性が認められることなどを明らかにした。中九州における上記の様相の背景としては、当該地域における打製石斧の増加や土偶・土器埋設にみられる祭祀行為の盛行にみられる文化の安定性を指摘している。

続いて、両地域で埋設土器に用いる形式の選択性の変化を検討し、北部において埋設土器が粗製化していくのに対し、中部では粗製土器が選択されなくなる形で全体が精製化していくこと、すなわち土器群全体の動態と埋設土器の選択とが密接な関わりをもっていたことを論じた(2001)。[第5図]

秋田かな子の「地域間交流を媒介する性質」論と鈴木徳雄の「間類型性」論

秋田かな子(1999)は深鉢の地域差を超えて関東～北陸に分布する後期の注口土器について「地域間交流を媒介する性質」、「広域に共有される無帰属の器種としての自己同一性」を指摘した。また、同時期に鈴木徳雄(1999)は後期前葉の「小仙塚類型群」について「系統間を媒介する「間系統的媒介性」とも言うような性質を持った類型」(362頁)と説明している⁽⁹⁾。

鈴木は翌年、後期前葉～中葉の浅鉢を素材として、「器種」を「行為」の指標として捉える〈器種—行為〉論を提示した(鈴木2000)。これは、土器のカテゴリ分化とその社会的・歴史的意義を評価する視点である。鈴木は、当該浅鉢が土器被覆葬⁽¹⁰⁾に供される点や、深鉢の分布圏を越えて広がるという点に着目している。

(4) 先行研究の方法論の整理と課題

小林達雄のパターン論や谷口康浩の分布論、松本直子や松本建速による形式ごとの作り分けの議論、石川健の埋設土器論は、いずれも一定の土器群全体を検討対象とした上で、土器形式・型式ごとに扱わ

れ方に差異が認められることを、出土状況や分布などの現象面として指摘したものである。

これに対し、製作属性と分布に注目して、特定の土器群のあり方を論じたのが秋田かな子や鈴木徳雄の「媒介性」の議論である。そこでは一定範囲に地域差をもって広がる個性的な諸土器群の中であって、特定地域に帰属せずに広域に分布する特定の土器形式・型式の性格が論じられた。

一方、対象とする土器群を限定し、それらを階層的な価値体系の上位に位置づける研究が、山内清男の移入・模倣論(亀ヶ岡式の精製土器)、鈴木正博の経済様式論(注口土器)、小杉康の威信財・交換財論(木の葉文浅鉢)、渡辺仁の威信財論(精製土器)、谷口康浩の土器情報論(曾利式土器)論などがある。これらの根拠としては、精製品であること、広域に分布すること、模倣品が存在すること、特殊な出土状況が見られることなどが挙げられている。

土器群をアイデンティティの表象と見るのは小林達雄や安孫子昭二の様式論であり、千葉豊の縁帯文土器文様論、大工原豊や関根慎二の獣面把手論、小林圭一の入組三叉文高杯論である。これらは、個性的な土器群が共有されることの意義を説明したものである。

本稿で取り上げたのは、さまざまな目的による研究を「カテゴリ認識」という側面から抽出したものであり、問題の設定や対象となる土器群の範囲、根拠などは多様である。対象の範囲に関して言えば、型式レベル(木の葉文浅鉢、多重沈線文注口土器、入組三叉文浅鉢など)、形式レベル(浅鉢、異形台付土器など)、精製・粗製レベル、様式レベル(諸磯式、北白川下層式など)という違いがある。根拠となる事象についても、2個セットで住居床面出土・伏せて墓坑内から出土といった特定の出土パターン、墓坑・住居床面などの特定遺構からの出土、特定遺跡からの出土、局地での出土、広域での出土という違いがある。その点では精製品が儀礼に関わる状況で出土することが多いとした渡辺仁の威信財論や、様式はアイデンティティに関わるというだけの議論は漠然としすぎており、説得力には乏しいと言わざるを得ない。やはり、対象・出土パターンの限定された事象をもとにした議論が不可欠であろう。

4. 「カテゴリ」認識を示唆する儀礼的要素

(1) 「カテゴリ」認識と儀礼の反復性

「カテゴリ」認識は前述したように、生活のあらゆる場面に存在していたものと想定されるが、我々が認識できるのは限られている。考古資料から具体的に復元しうるカテゴリ認識は、異なった次元の複数の属性との間の結びつきがパターンとして認められることが必要だからである。例えば技術・技法や装飾など製作にかかわる属性、使用痕や破壊行為などの使用にかかわる属性、住居や墓坑など出土状況に関わる属性などの諸属性間の結びつきのパターンである。

その中で、もっとも説得力をもって検討できる限定されたパターンは儀礼行為におけるものである。谷口康浩(2008)は文化記号論の見解を踏まえて、儀礼における行為の再現・反復の重要性を指摘し、考古学においても祭儀空間の意義や象徴的コードの読み取りを行うため、詳細なパターン認識の必要性を提示している。本稿で扱う「カテゴリ」認識を検討するにあたって、器物が扱われる場である儀礼自体が定式化され、反復される性質をもっていることが重要である。上記の先行研究の多くが、儀礼行為に関わる事象を扱ってきたのもそうした理由によるものであろう。

以下では、前節で紹介した諸研究を含めた先行研究や筆者の検討事例を用いて、儀礼行為における特定のカテゴリ認識の存在を示唆する要素を検討しておく。

(2) 製作時に付与される要素

製作技法

土器製作時に付与される属性には土器の用途と密接に関わる形態のほか、成形技法、胎土・調整の精粗、文様・装飾などがある。松本建速による大洞系浅鉢と遠賀川系甕の議論は、製作工程全般に関わる問題である。

装飾の共有関係

文様・装飾は、その共有関係が重要である⁽¹¹⁾。例えば、谷口が提起した土偶文様の共有の問題は、土偶と土器との関係をめぐるカテゴリ認識に関わる重要な視点である。筆者も勝坂式期の顔面把手と釣手土器との間での共通の装飾の組み合わせを複数組

確認している(中村2009b)。

鈴木正博や秋田かな子が注目した加曾利B1式の注口土器に施される多重沈線文は、秋田(1998)が指摘するとおり横帯文を基調とする加曾利B1式の他の諸形式の中で異色の存在である。その原形は堀之内2式新段階に秋田が「石神類型」と呼ぶ特徴的な文様として出現するが、それを施すのは関東地方においては注口土器のほか双口土器や小形壺などの稀少な形式や下部に単孔を持つ筒型土偶に限定される(中村2008c)。東京都中高瀬遺跡では「中高瀬タイプ」と呼ばれる加曾利B2式期の特徴的な土偶の一群が出土したが、それらは同時期の深鉢の突起と形態・装飾技法を共有している(林2009)。

(3) 使用～廃棄時に土器自体に付与される要素

土器の使用痕跡には、ススゴケの有無・付着範囲や摩滅などの指標があるが、ここでは、より特殊な破壊行為を挙げておきたい。破壊行為には、器体穿孔・加撃、文様剥ぎ取り、特定部位のもぎ取り・顔面部破壊などがある。

底部穿孔・加撃

住居入口部の埋甕や屋内外の埋設土器への底部穿孔は古くから研究の蓄積がある。桐原健(1973)は底部穿孔埋甕が顕在化する中期後半には中葉のような器形のバラエティが乏しくなることを指摘した。この時期に限らず、底部穿孔埋甕・埋設土器に用いられる土器自体は一般的な深鉢が用いられることが多く、形式や装飾などの特徴はほとんど認められない。底部穿孔は、前期の浅鉢に既に認められる。前掲の土肥らが論じた仮器化された深鉢の葬送儀礼への使用の問題と同じく、埋甕や埋設土器への転用行為との間のカテゴリ関係として検討すべきであろう。部分の剥ぎ取り・打ち欠き

口縁部突起のもぎ取りは古く顔面把手に対して藤森栄一(1968)が注目し、土器器体から独立して取り扱われていることが指摘された。顔面把手には、顔面への穿孔・打ち欠き・くり抜きなどの行為も存在する(吉本・渡辺2004)。勝坂式期の釣手土器の形態が、顔面把手の顔面部を打ち欠いた形態と類似することは古くから指摘されているほか(鳥居1924)、曾利I式期以降に出現する顔面付釣手土器の顔面部もしばしば打ち欠かれており、顔面把手と

(10) 國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要 第2号(平成22(2010)年3月)

釣手土器とが共通の性格を有することを示している (Nakamura2009)。

口縁部突起の打ち欠きは土肥らが論じたもののほか、水沢教子 (2003) が長野県屋代遺跡群出土の突起が打ちかかれた中期大木9式深鉢のX線観察を実施し、不自然な形で切り落とされていることを明らかにしている。阿部友寿 (2005) は晩期の配石遺構に後期の土器突起や注口土器の注口部が集積されていることを取り上げ、縄文人が突起や注口部に特殊な意識を持ち、収集して供献していたことを指摘した。戸田哲也 (2006) は突起のほか土器破片についても、単独で収集されていた可能性を指摘している。これらの研究は土器突起や注口部に対する特殊な認識という、部位に対するカテゴリ認識の問題へ発展する可能性をもっている。

(4) 出土状況から付与される要素

葬送に関わる儀礼空間

出土する場合は、各種の遺構が想定できるが、ここでは儀礼行為に関わる場の属性に限定しておきたい。まず、儀礼の目的の明瞭な葬送儀礼に関わる墓域が挙げられる。墓域は墓坑内、墓坑群上に区分できるが、これらからの土器の出土事例については多くの研究の蓄積がある (中村2008e)。小杉、石川、秋田、鈴木徳雄らの木の葉文浅鉢、様式構造、注口土器、浅鉢に関する議論には墓坑出土例が大きな鍵となっている。

筆者もこれらの研究に導かれて後期前半期の土器副葬・土器被覆葬を検討し、同じタイプの土器群が分布する関東西南部と中部高地の両地域において、加曾利B1式期には関東西南部／中部高地、土器副葬／土器被覆葬、深鉢・注口土器・鉢・舟形土器／浅鉢という3重の対比関係が認められ、葬送に関わる土器のカテゴリ認識に差異が存在することを明らかにした (中村2006・2008b・2008c)。当該期の舟形土器は関東西南部に集中しその半数が墓域出土という特徴を持つ (中村2005)。あるいはその背景にはアイデンティティ意識が存在するのかもしれない。また、縄文時代全般を見た場合には、使用される土器形式に各地域・時期の独自性が認められるものの、いずれも飲食に関わる形式に限定されるという特徴が認められる (中村2008e)。

住居廃絶に伴う儀礼空間

住居廃絶に伴う儀礼も、その目的が比較的理解しやすい。その認定基準は焼失住居であること、床面に完形土器や石棒などが遺存していることなどである。小林達雄の井戸尻パターン論、小杉の木の葉文浅鉢論のほか、中期の釣手土器 (藤森1965)、後期の注口土器 (須原2003)、中期東北の壺や浅鉢 (阿部2006) などの床面出土例が注目されている。長野県曾利遺跡や伴野原遺跡で中期の釣手土器、東京都なすな原遺跡で後期の注口土器が、供献されたと思われるパン状・クッキー状の炭化物とともに焼失住居床面から出土している例がある (中村2007)。釣手土器や異形台付土器など非飲食系の形式が含まれていることは墓坑出土例との大きな違いである (中村2009c)。

埋設土器・埋甕

埋設土器や埋甕にいかなる土器が用いられるかという点も地域・時期の独自性が認められる。

土器棺専用の壺を発展させた後期前半期の東北北部 (葛西2002) や、弥生時代の甕棺に匹敵する大形土器を用いた中期井戸尻Ⅲ式～曾利Ⅰ式の中部高地 (長沢1994) などは最も特徴的であるが、前述した石川健が論じたように、晩期の九州北部と中部の間でも使用する土器の精粗に違いがある。

埋甕については、前述した底部穿孔例のほか、その地域の主要な土器様式でない様式の土器が一定数用いられることの背景に、母親の出身地の象徴としての性格をみる佐々木藤雄 (1981) の研究がある。

セット関係

出土する空間のほか、共伴遺物とのセット関係も、カテゴリ認識の指標となる。山口逸弘 (1999) は、中期阿玉台式期の群馬県において、様式を異にする2個体の深鉢が土坑に埋納されている例を挙げ、意識的選択の産物と論じた。こうした例は異なったカテゴリの土器をあえて一緒に埋納したことを示している。

(5) 「カテゴリ認識」に関わる諸属性の結びつき

考古学的に「カテゴリ認識」を検討するために、これまで挙げてきた諸属性の結びつきを以下のように整理する。属性は大きく製作・使用・出土状況の3つに分類され、それぞれ技法・形式・装飾、穿孔・

打ち欠き・剥ぎ取り、葬送（副葬・被覆葬・墓上供献）・住居廃絶・埋甕・伏甕・埋設などに細分される。本節の最初に挙げた遠賀川系の甕と大洞系の高杯の問題は、技法と形式すなわち、製作属性内の諸要素の結びつきとして説明される。後期の浅鉢と土器被覆葬との関係は、製作属性内の形式属性と、出土状況属性内の葬法属性との関係として整理できよう。また、葬送儀礼に関わる土器文様の剥ぎ取り行為は使用属性内の剥ぎ取り属性と出土状況属性内の葬送儀礼との結びつきであるが、土肥らが想定したように文様剥ぎ取りを前提として製作されていたとすれば、製作・使用・出土状況の3つの属性が総合的に結びついていたと理解することが可能である。

5. カテゴリ認識研究の展望

「カテゴリ認識」研究の意義と、その方法論について検討を加えてきた。モノを作り・使った人々が、そのモノが他のモノといかに結びつけてきたのか、いかなる「カテゴリ」に属するものとして認識していたのかを問うこの研究は、モノとヒトの心との双方向的な関係を検討するための最も基礎的な作業である。

本稿では、先行研究をもとに、縄文土器のカテゴリ認識に関わる若干の事例を紹介してきた。縄文土器の「カテゴリ認識」は、こうした諸属性の結びつきをコンテキストに即して、丁寧に解き明かしていくことが出発点となる。考古学的に解明するのは困難であろうが、その結びつきは、レヴィ＝ストロース（1976）の紹介した「野生の思考」によって、形・機能・色・使用場面その他の属性に基づいて、説明されていたのであろう。

カテゴリ認識は一定の伝統性を持つ、いわば静的な構造として捉えられる部分がある。本稿でも、静的な関係性を抽出した研究を多く紹介した。しかし、嗜好性や地域間関係の地域差にもとづいて構造の地域差・時期差が生じたとする松本直子（19967）や石川健（2001）の研究、対比関係にもとづいて結びつきに差が生じたとする筆者の見解（中村2008c）があるように、時期や地域によってカテゴリ認識が変化することも重要である。

本稿冒頭で述べたように、広い視野から動態を明らかにすることが考古学における重要な課題となる。

今後は、特定の時期・地域におけるカテゴリパターンの抽出を積み重ね、そうしたカテゴリ認識がいかに形成されたかを、歴史的脈絡の中で検討していくことが必要になっていくだろう。

最後に、今後の課題について、筆者の注目する土器形式（器種）の問題に焦点を絞っていくつかの点を指摘しておきたい。

まず、特定のカテゴリ認識の形成・定着過程の検討がある。祭祀・儀礼に密接に関わる土器群は、現在のところ縄文時代前期の浅鉢まで遡る。前期前半に浅鉢が出現し、後半には分布範囲・数量・型式を増加させ、多くの墓坑埋納例・住居床面出土例が知られるようになるが、こうしたプロセスについて、他の土器群・文化要素との関係性を時期を追って検討していくことが必要である。

次いで、形式間のカテゴリの共有・対立の問題がある。特に、中期中葉・中期末葉・後期中葉など土器形式が増加する時期において、それら間のカテゴリ認識に関わる関係性がいかなるものであったのかという検討は、機能分化にとどまらない形式分化の意味を探る上で重要であろう。

同一形式・型式においても、必ずしもカテゴリ認識が共有されているとは限らない。深鉢に比べて数が少なく、日常の実用製品とは考えられない土器形式の性格を考える上では、形式間関係の問題と共に認識の継承・変容の問題は、欠くことはできない。

こうした個々の脈絡におけるカテゴリ認識の検討の後、それらのモデルの比較検討が第二のステップとなる。特殊な土器形式をめぐっては、製作・打ち欠き・儀礼への使用の意識・志向性に、しばしば時空を超えて類似したが窺われるが（小林1993、Nakamura2009）、改めてカテゴリの共有・変異の問題として整理する必要があるだろう。

本稿は國學院大學学術フロンティア事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」、21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」、オープンリサーチセンター選定事業「モノと心にもみる伝統の知恵と実践」における祭祀・儀礼に関わる考古学的方法論および大場磐雄「神道考古学」形成過程の検討の共同研究に携わる

中で構想してきたものである。学内外の関係者の皆様に謝意を表したい。

注

- (1) 「神道考古学の体系」(大場1964)においては、「祭祀遺跡発見の遺物」の項目中に、沖ノ島や石上神宮などのように古墳出土品と同様・多種類の遺物を出土する場合もあるが、「それらの全部を祭祀遺物として説くことは、原史時代の遺物の全般にわたる結果となり、かえって煩雑を加えると考える」(48頁)という記述がある。
- (2) 折口信夫の「古代」研究、あるいは「古代学」は、歴史的範囲としての日本の古代を示すものではなく、「合理化・近世化された古代信仰の、元の姿を見る事」(折口1930)であった。昭和初年には沖縄の民俗とともに台湾やアメリカ北西海岸の先住民の民族誌から着想を得ており、著作に「まなあ(マナ)」の語を用いたりしていたことは、折口の視点が単に日本の「古代」だけでなく広く人類一般に向かっていたことを示していることは確認しておく必要がある。
- (3) 戦後の縄文時代の精神文化に対する積極的な言及は配石遺構など、後世の自然物への信仰と関わりのある分野に限られる(中村2008a)。
- (4) 例えば、堅穴住居覆土に多量の略完形土器が廃棄される事象を季節的な土器廃棄として縄文人の廃棄観念を論じた吹上パターン論(1974)、火災住居床面に日常的な道具がほとんど残されていないことから住居空間の神聖性を論じた屋内空間論(1987)、土器の突起数などから3や5に対する特定の観念を論じた聖数論(1988)、集落・住居・土器その他多くの事象わたる二項対立論(1993)など。
- (5) 本稿で用いる様式(Style)・形式(Form)・型式(Type)は小林達雄(1977)の用法に従う。
- (6) ケンプトンのような、形態の微妙な違いを検討したものと、当事者による型式レベルの区分とその動態を扱った論考がある(高木2003、黒木2007)。
- (7) いうまでもないが、ここでいう「型式」は山内のいう時間・空間の単位としての「型式(けいしき)」であり、本稿で用いる「型式(かたしき)」とは異なる。
- (8) これらの優品の存在を、日常/非日常のような差異を考慮することなく直ちに、階層差に結びつける点については小杉康(1991)の批判がある。
- (9) 他に同様の性質に関して「間系統類型」「間型式類型」の語を用いている。
- (10) 土器を遺体上に倒置ないし覆う葬法は「甕被葬」「鉢被葬」「被甕葬」「土器片被り葬」などと呼ばれているが、筆者(2006)は総称として「土器被覆葬」の語を用いている。
- (11) 小林正史(2006)は、晩期後半において浅鉢が壺に先行して区画文系工字文から三叉文系工字文へ変化す

ることを挙げ、その理由として、装飾部位の外部からの見え方の違いを想定している。こうした例においては、装飾の違いを形式のカテゴリ差のみに起因するとみるのは危険である。

引用文献

- 秋田かな子 1998 「加曽利B1式土器の構造変化とシステム-南関東西南部における様相をふまえて-」『東海史学』第32号
- 秋田かな子 1999 「注口土器の系統変化」『季刊考古学』第69号
- 安孫子昭二 1978 「縄文土器の型式と編年」『日本考古学を学ぶ』1 有斐閣
- 安孫子昭二 2005 「連弧文土器様式の集団」『東京考古』第23号
- 阿部昭典 2004 「縄文土器の器種分化(予察)-有孔罅付土器の地域的変異について-」『東アジアにおける新石器文化と日本I』國學院大學
- 阿部昭典 2006 「縄文時代中期末葉の器種の多様化」『考古学』IV 安齋正人
- 阿部昭典 2009 「縄文時代における徳利形土器の祭祀的側面-中期中葉の東北地方を中心に-」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号
- 阿部友寿 2005 「縄文時代後晩期の再利用品と配石遺構の関係性」『神奈川考古』第41号
- 石井 匠 2009 『縄文土器の文様構造』未完成考古学叢書7 アム・プロモーション
- 石川 健 1999 「九州における縄文後・晩期土器の様式構造変化と地域性」『古文化談叢』第43集
- 石川 健 2001 「九州縄文後・晩期における埋設土器の性格」『古文化談叢』第46集
- 上野佳也 1980 「情報の流れとしての縄文土器型式の伝播」『民族学研究』第44巻第4号
- 上野佳也 1983 『縄文人のこころ』日本書籍
- エルツ・R(吉田禎吾ほか訳) 1980 『右手の優越』垣内出版
- 大場磐雄 1930 「原始神道の考古学的考察」『神道講座』第9冊・第10冊・第12冊 神道研究会
- 大場磐雄 1935a 「神道考古学の提唱と其の組織」『神社協会雑誌』第34年第1巻
- 大場磐雄 1935b 「赤城山神蹟考」『考古学雑誌』第22巻第11号・第12号
- 大場磐雄 1964 「神道考古学の体系」『国体論纂』下 國學院大學
- 大場磐雄 1970 「祭祀遺蹟の研究」『祭祀遺蹟-神道考古学の基礎的研究-』角川書店
- 大塚達朗 2008 「縄文土器研究解題-山内清男-」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 折口信夫 1930 「追ひ書き」『古代研究』民俗学編2 大岡山書店
- 葛西 勳 2002 『再葬土器棺墓の研究』再葬土器棺墓の研究 刊行会

- ギデンズ・A 1988 『社会理論の最前線』ハーベスト社
- 桐原 健 1973 「仮器の系譜－底部穿孔土器の性格－」『古代文化』第25巻第2号
- 朽木 量 2004 『墓標の民族学・考古学』慶應義塾大学出版会
- 黒木梨絵 2005 「土器のカテゴリー変化に関する認知考古学的研究－板付系と突帯文系の検討から－」『考古学研究』第52巻第3号
- 小杉 康 1984 「物質的事象としての搬出・搬入、模倣製作」『駿台史学』第60号
- 小杉 康 1985 「木の葉文浅鉢形土器の行方－土器の交換形態の様相－」『季刊考古学』第12号
- 小杉 康 1988 「縄文時代の時期区分と縄文文化のダイナミックス」『駿台史学』第73号
- 小杉 康 1991 「縄文時代に階級社会は存在したのか」『考古学研究』第37巻第4号
- 小杉 康 1995 「文化制度としての模倣製作－課題としての飛騨：岐阜県白川村島中通遺跡から－」『飛騨と考古学』飛騨考古学会
- 小杉 康 2003 『縄文のマツリと暮らし』先史日本を復元する3 岩波書店
- 小杉 康 2006 「土器造形の発達とカテゴリー操作」『心と形の考古学』同成社
- 後藤 明 2004 「物質文化」『現代考古学事典』同成社
- 小林圭一 2006 「亀ヶ岡文化成立期の地域相について－北上川下流域の大洞BC式の検討を通して－」『縄紋社会をめぐるシンポジウムⅣ－土器型式をめぐる諸問題－予稿集』縄紋社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所
- 小林青樹 2007 「弥生絵画の象徴考古学－身体・ジェンダー・戦争－」『上代文化』第40輯
- 小林青樹 2009a 「杵で臼をつく人」『栃木史学』第23号
- 小林青樹 2009b 「弥生集落の祭祀機能と景観形成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集
- 小林達雄 1965 「遺物埋没状態及びそれに派生する問題（土器廃絶処分の問題）」『米島貝塚』庄和町教育委員会
- 小林達雄 1966 「縄文早期前半に関する問題」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ』多摩ニュータウン遺跡調査会
- 小林達雄 1974 「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』第93号
- 小林達雄 1977 『日本原始美術大系1』講談社
- 小林達雄 1979 『日本の原始美術Ⅰ』講談社
- 小林達雄 1987 「縄文時代の居住空間」『國學院大學大学院紀要 文学研究科』第19輯
- 小林達雄 1988 「数の概念」『古代史復元3』講談社
- 小林達雄 1993 「縄文集団における二者の対立と合一性」『論苑考古学』天山舎
- 小林達雄 1996 「第1の道具と第2の道具」『縄文と弥生』クバプロ
- 小林達雄 2003 「縄文革命の人類史的意義」『東アジアにおける新石器文化の成立と展開』國學院大學
- 小林達雄 2005 「勝坂式土器様式圏と火炎土器様式圏の対立」『日本の考古学』上巻 学生社
- 小林達雄 2008 『縄文人の思考』筑摩書房
- 小林正史 2006 「土器文様はなぜ変わるか：多面的アプローチの重要性」『縄紋社会をめぐるシンポジウムⅣ－土器型式をめぐる諸問題－予稿集』縄紋社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所
- 桜井準也 1991 「縄文人の眼、考古学者の目－認知考古学の可能性－」『東邦考古』第15号
- 佐々木藤雄 1981 「縄文時代の通婚圏」『信濃』第33巻第9号
- 杉原莊介 1943 『原史学序論』葦芽書房
- 杉山林継 1994 「巻頭言」『情報祭祀考古』創刊号
- 鈴木徳雄 1999 「称名寺式関沢類型の後裔－堀之内1式期における小仙塚類型群の形成－」『縄文土器論集』六一書房
- 鈴木徳雄 2000 「縄紋後期浅鉢形土器の意義－器種と土器行為の変化－」『縄文時代』第11号
- 鈴木正博 1980 『大田区史』資料編 考古Ⅱ 大田区
- 鈴木正博 2000 「土器型式」の眼差しと「細別」の手触り－大洞A1式「縁辺文化」の成立と西部弥生式における位相－『埼玉考古』第35号
- 須原 拓 2003 「住居址内出土の注口土器－出土状態からみた注口土器の機能・用途について－」『史叢』第68号
- 関根慎二 2004 「諸磯b式土器に付けられたイノシシ顔－装飾の意味を考える－」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』22
- ターナー・W・V (富倉光雄訳) 1976 『儀礼の過程』思索社 (原著1969年)
- 高木暢亮 2003 「考古遺物におけるカテゴリーの問題－北部九州の突帯文土器を対象として－」『認知考古学とは何か』青木書店
- 田中大輔 2009 「土器集積に関する覚書」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号
- 田中良之 1982 「磨消縄文伝播のプロセス－中九州を中心として－」『森貞次郎博士古希記念 古文化論集』上
- 谷川磐雄 1927 「南豆に於ける特殊遺跡の研究」『中央史壇』第13巻第6号～第8号
- 谷口康浩 1994 「勝坂式土器の地域性－土器型式の広域型・漸移型・局地型－」『季刊考古学』第48号
- 谷口康浩 1998 「土偶型式の系統と土器様式－勝坂系土偶伝統と中期土器様式との関係－」『土偶研究の地平2』勉誠社
- 谷口康浩 2002 「縄文土器型式情報の伝達と変形－関東地方に分布する曾利式土器を例に－」『土器から探る縄文社会』山梨県考古学協会
- 谷口康浩 2008 「総論：コードとしての祭祀・儀礼－行為の再現性と反復性－」『月刊考古学ジャーナル』No.578
- 谷口康浩 2009a 「縄文時代の生活空間－「集落論」から「景観の考古学」へ」『縄文時代の考古学8 生活空間』同成社
- 谷口康浩 2009b 「縄文時代竪穴住居にみる屋内空間のシンボリズム」『環状列石をめぐるマツリと景観』発表資料

- 集』國學院大學伝統文化リサーチセンター
 デュルケーム・E 1980 『分類の未開形態』法政大学出版局（原著1903年）
 土肥 孝 2007 『日本の美術』第497号（縄文土器 中期）
 土肥 孝・中東耕志・山口逸弘 1996 「文様が剥がされた土器－縄文時代中期の土器廃絶例について－」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』13
 時津裕子 1999 「近世墓にみる階層性－筑前秋月城下の事例から－」『日本考古学』第9号
 戸田哲也 2006 「縄文土器型式の分布圏」『縄文社会をめぐるシンポジウムⅣ－土器型式をめぐる諸問題－予稿集』縄文社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所
 鳥居龍蔵 1924 『諏訪史』第1巻 信濃教育会諏訪部会長
 長沢宏昌 1994 「甲府盆地周辺に見られる縄文時代中期の土壙墓と土器棺再葬墓－井戸尻Ⅲ式～曾利Ⅰ式期の場合－」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』10
 中村 大 2009 「祭祀考古学研究と解釈：コンテキストとスケール」『環状列石をめぐるマツリと景観 発表資料集』國學院大學伝統文化リサーチセンター
 中村耕作 2005 「縄文時代後期の舟形土器」『上代文化』第39輯
 中村耕作 2006 「縄文時代後期前半期の土器被覆葬」『史学研究集録』第31号
 中村耕作 2007 「クッキー状・パン状食品」『縄文時代の考古学5 なりわい』同成社
 中村耕作 2008a 「大場磐雄の縄文時代精神文化研究－「石器時代宗教思想」研究から「縄文人の信仰」研究へ－」『祭祀考古学』第7号
 中村耕作 2008b 「縄文時代後期の土器副葬－関東・中部地方における葬送儀礼の一類型－」『神奈川考古』第44号
 中村耕作 2008c 「葬送儀礼における土器形式の選択と社会的カテゴリ－縄文時代後期関東・中部地方の土器副葬と土器被覆葬－」『物質文化』No.85
 中村耕作 2008d 「釣手土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
 中村耕作 2008e 「墓壙への埋納」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
 中村耕作 2008f 「神道考古学の形成と伊豆の祭祀遺跡－大場磐雄の伊豆調査－」『伊豆の神仏と國學院の考古学 発表資料集』國學院大學伝統文化リサーチセンター
 中村耕作 2009a 「大場磐雄「神道考古学」提唱前夜の祭祀遺跡研究」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号
 中村耕作 2009b 「顔面把手と釣手土器－伊勢原市三之宮比々多神社所蔵の蛇体裝飾付顔面把手を基点として－」『考古論叢神奈河』第17集
 中村耕作 2009c 「家送りの供え・葬送の供え」『まつりのそなえ 御食たてまつるもの』國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
 中村耕作 2010a 「「古代学」としての考古学・「神道史」としての考古学」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第2号
 中村耕作 2010b 「釣手土器の展開過程」『史葉』第3号
 千葉 豊 1989 「緑帯文系土器群の成立と展開－西日本縄文後期前半期の地域相－」『史林』第72巻第6号
 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係－淀川水系を中心に－」『考古学研究』第20巻第4号
 濱田耕作 1922 『通論考古学』大鏡閣
 林 克彦 2009 「中高瀬遺跡の土偶－関東地方西部・加曾利B式期土偶の一類型「中高瀬タイプ」の提唱」『扶桑』青山考古学会
 林 謙作 1979 「縄文期の村落をどうとらえるか」『考古学研究』第26巻第3号
 林 謙作 1993 「石狩低地帯南部の環状周堤墓」『考古論集 潮見浩先生退官記念論文集』
 藤本 強 2007 「東アジアにおける日本列島の自然と基層文化」『神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成研究報告Ⅰ』國學院大學
 藤森栄一 1965 「釣手土器論」『月刊文化財』第19号
 藤森栄一 1968 「顔面把手付土器論」『月刊文化財』第61号
 ブルデュ・P（今村仁司ほか訳） 1988・1990 『実践感覚Ⅰ・Ⅱ』みすず書房（原著1980年）
 松井 健 1991 『認識人類学論攷』昭和堂
 松本直子 1996 「認知考古学的視点からみた土器様式の空間的変異－縄文時代後・晩期黒色磨研土器様式を素材として－」『考古学研究』第42巻第4号
 松本直子 1997 「認知考古学の理論的基盤」『HOMINIDS』1
 松本直子 2000 『認知考古学の理論と実践－縄文から弥生への社会・文化変化のプロセス－』九州大学出版会
 松本直子 2006 「縄文イデオロギーと物質文化」『心と形の考古学』同成社
 松本直子・中園聡・時津裕子編 2003 『認知考古学とは何か』青木書店
 松本建速 1998 「大洞A'式土器を作った人々と砂沢式土器を作った人々」『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集刊行会
 水沢教子 2003 「縄文土器の突起周辺のX線透過観察－長野県更埴市屋代遺跡群の研究その3－」『長野県立歴史館研究紀要』第9号
 溝口孝司 1993 「「記憶」と「時間」：その葬送儀礼と社会構造の再生産において果たす役割－ポスト=プロセス考古学的墓制研究の1つの試みとして－」『九州文化史研究所紀要』第38号
 溝口孝司 1998 「墓前のまつり」『日本の信仰遺跡』雄山閣出版
 宮地直一（谷川磐雄代筆） 1926-28 「神社と考古学」『考古学講座』第1～3・5～8・10・12・15・17・20・24号（1929合冊して再版）雄山閣
 山口逸弘 1999 「土壙出土土器の選択性－中期土壙の2個体の共伴例から－」『縄文土器論集』六一書房
 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器

- の終末』『考古学』第1巻第3号
- 山内清男 1964 「縄紋式土器・総論」『日本原始美術』1 講談社
- 山内清男 1969 「縄文文化の社会－縄文時代研究の現段階－」『日本と世界の歴史1』学習研究社
- 吉田恵二 2007 「人の器、神の器」『國學院大學考古学資料館紀要』第23輯
- 吉田恵二 2008 「列島における儀礼・祭祀の誕生と展開－モノから心へ－」『伊豆の神仏と國學院の考古学 発表資料集』國學院大學伝統文化リサーチセンター
- 吉田恵二 2009 「神の器、人の器」『まつりのそなえ 御食たてまつるもの』國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
- 吉本洋子・渡辺誠 2004 「目鼻口を欠く人面裝飾付深鉢形土器」『山梨考古学論集V』山梨県考古学協会
- リーチ・E (青木保・宮坂敬造訳) 1981 『文化とコミュニケーション』紀伊国屋書店 (原著1976年)
- レヴィ=ストロース・C (仲沢紀雄訳) 1970 『今日のトテミズム』みすず書房 (原著1962年)
- レヴィ=ストロース・C (大橋保夫訳) 1976 『野生の思考』みすず書房 (原著1962年)
- 渡辺 仁 1972 「アイヌ文化の成立－民族・歴史・考古諸学の合流点－」『考古学雑誌』第58巻第3号
- 渡辺 仁 1990 「縄文式階層化社会と土器の社会的機能」『縄文式階層化社会』六興出版
- Hodder, I 1982 *Symbols in Action : Ethnoarchaeological studies of material culture*. Cambridge University Press, Cambridge
- Kempton, W 1982 *The Folk Classification of Ceramics: A study of Cognitive Prototypes*. Academic Press, New York
- Miller, D 1982 Artifacts as products of human categorization processes. in I. Hodder(ed.) *Symbolic and Structural Archaeology*. Cambridge University Press, Cambridge
- Miller, D 1985 *Artefacts as categories: A study of ceramic variability in Central India*. Cambridge University Press, Cambridge
- Nakamura, K 2009 Jomon pottery as liminality. in Taniguchi(ed.) *The archaeology of Jomon ritual and religion*. Kokugakuin University, Tokyo
- Renfrew, C and C. Scarre (eds.) 1999 *Cognition and Material Culture: the Archaeology of Symbolic Storage*. McDonald Institute for Archaeological Research University of Cambridge, Cambridge